

物事に対処する心構え～「菜根譚」より

事を議する者は、身、其の外に在りて、宜(よろ)しく利害の情を悉(つく)すべし。
事に任ずる者は、身、事の中に居(お)りて、当(まさ)に利害の慮(おもんばかり)
を忘るべし。 洪 自誠

今月は、以前に何回かご紹介したことのある「菜根譚」から、あらためて取り上げてみました。大意は、「ものごとを相談するときは、わが身をその埒外(らちがい)において、客観的に利害得失の実情を十分に見窮めるようにせよ。また、実行に当たるときには、わが身をその渦中に置いて、おのれの利害得失の打算を忘れるようにせよ。」(今井宇三郎訳注「菜根譚」岩波文庫より)となっています。

まず、前段の「事を議する」についてですが、組織内で合意形成を図る際などにも当てはまると思われます。人間は、自らの利害・得失をまずは考えがちですが、組織における利害・得失とは必ずしも一致しないものです。自己の利害・得失を優先し、その組織から離れるのであれば、それはその人の判断、決断の問題ですが、組織を去ることを考えていないのであれば、そのような態度は、組織にとって有害であり、長い目で見れば、その人にとっても決して良い結果をもたらさないものと思われます。

また、自己の考えにとらわれて、それから離れられないことを「我執」といいますが、そのような状態の人がいると、議論そのものが平行線でまったく進まなくなることもあります。自己の意見を持つこと、それを主張することは大切なことですが、その際に「わが身をその埒外(らちがい)において、客観的に利害得失の実情を十分に見窮める」ことも忘れるべきではないと思います。

ちなみに、去年の6月に、このブログで稲盛和夫さんの「動機善なりや、私心なかりしか」という言葉をご紹介しましたが、今回の菜根譚の前段の内容は、稲盛さんの言葉と軌を一にするものと思われます。

後段の「事に任ずる」についてですが、前段のように、考えるときには客観的かつ冷静でいる必要はあるが、いざ行動する際には、「おのれの利害得失の打算を忘れ」、果敢に対処すべきとの内容と思われます。仕事の進め方などについて、職場などで議論をすることはもとより大事ですが、我々は、あくまでも実務家であり、課題の解決等に向けて実際に取り組んでいかなければいけない立場にいます。その際に、評論家のような態度で、ただ物事を批評するだけでは、事態は一向に進みません。まさにこの言葉にあるように、「わが身をその渦中に置いて」、いわば、当事者意識をしっかりと持って、自分のできることを精一杯行うということが、組織にとって価値があるだけでなく、その人の評価を高めることにも繋がっていくものと思われます。

ちなみに、この言葉を見て、新古典派経済学を代表するイギリスの経済学者アルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall、1842年7月26日 - 1924年7月13日)の有名な言葉、「経済学者は、冷静な頭脳と温かい心(cool head, but warm heart)を持たねばならない」を連想しました。経済学者ならずとも、職業人として、この心構えは常に持っていたいと思います。

令和7年(2025年)8月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理 事 長 松 井 聡 明